

① 【調査した遺跡】

臨空都市の整備にあたって平成 16 年度～平成 20 年度の 5 カ年で実施

しもますだした下増田地区を中心とする発掘調査では、まぢうらいせき町裏遺跡・つるまきまえいせき鶴巻前遺跡・

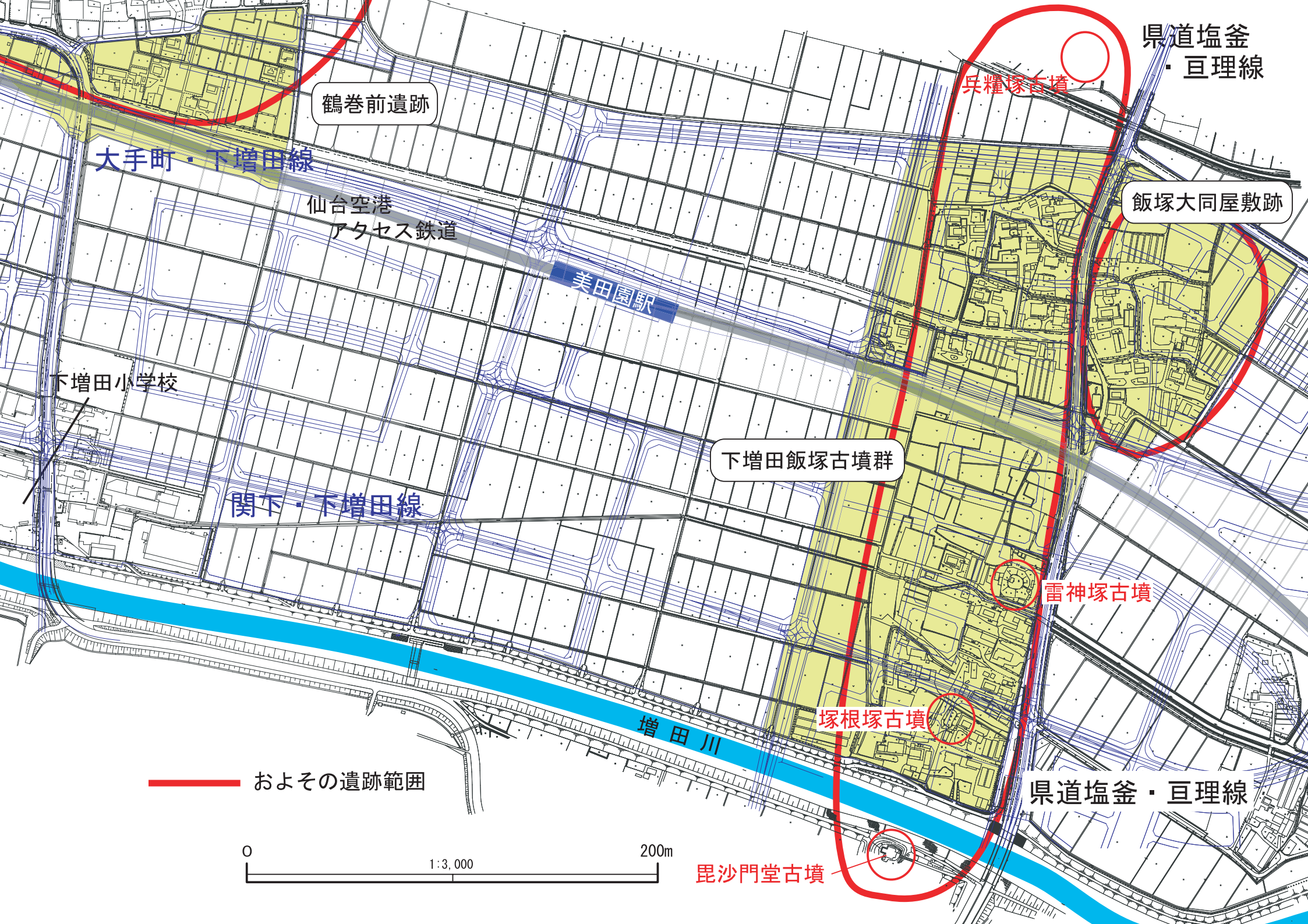
しもますだいづかこふんぐん下増田飯塚古墳群・いづかだいどうやしきあと飯塚大同屋敷跡の調査を行いました。これらの遺跡

からは、古墳時代・平安時代・鎌倉時代・江戸時代などの遺構や遺物が

発見されており、中でも下増田飯塚古墳群からは、古墳時代の遺構や遺

物が多く発見されています。今回の展示では、下増田飯塚古墳群・飯塚

大同屋敷跡での発掘調査の成果について紹介いたします。



県道塩釜
・亘理線

兵糧塚古墳

鶴巻前遺跡

大手町・下増田線

仙台空港
アクセス鉄道

飯塚大同屋敷跡

美田園駅

下増田小学校

下増田飯塚古墳群

関下・下増田線

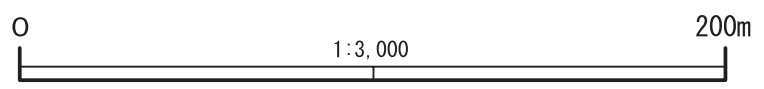
雷神塚古墳

増田川

塚根塚古墳

— およその遺跡範囲

県道塩釜・亘理線



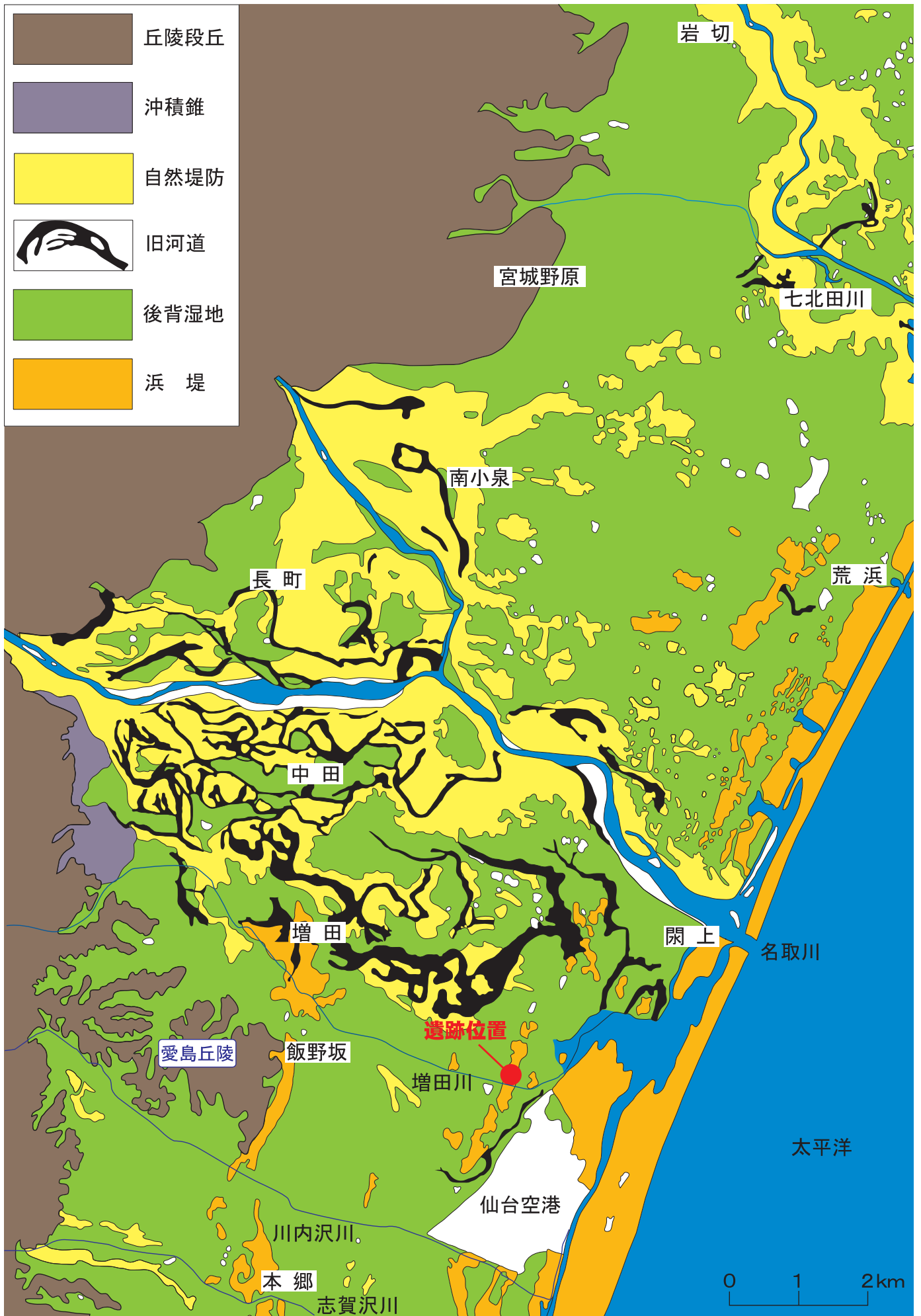
毘沙門堂古墳

下増田飯塚古墳群は、J R 名取駅の南東約 3～4km 地点に所在する古墳群で、遺跡の中を県道塩釜・亘理線しおがま わたりが南北方向に貫つらぬいて走っています。

市内では大きく 3 列の浜堤列ひんていれつが認められますが、本古墳群は現海岸線から西側約 2 km 付近に南北方向にのびる 2 列目の浜堤上に立地しています。遺跡が所在する浜堤上の標高は 2m 前後で、調査のため地面を掘り下げると、標高 50 cm 前後の高さで遺構が見つかりました。


この浜堤の東西両側は、むかしから低湿地が広がっていたものと考えられており、遺跡の周辺はつい最近まで水田耕作が行なわれていた田園地帯でした。

現在の遺跡周辺は、仙台空港アクセス鉄道をはじめてんぼ店舗や住宅地などの建設が行われ、遺跡周辺の景観は大きく変わってきています。



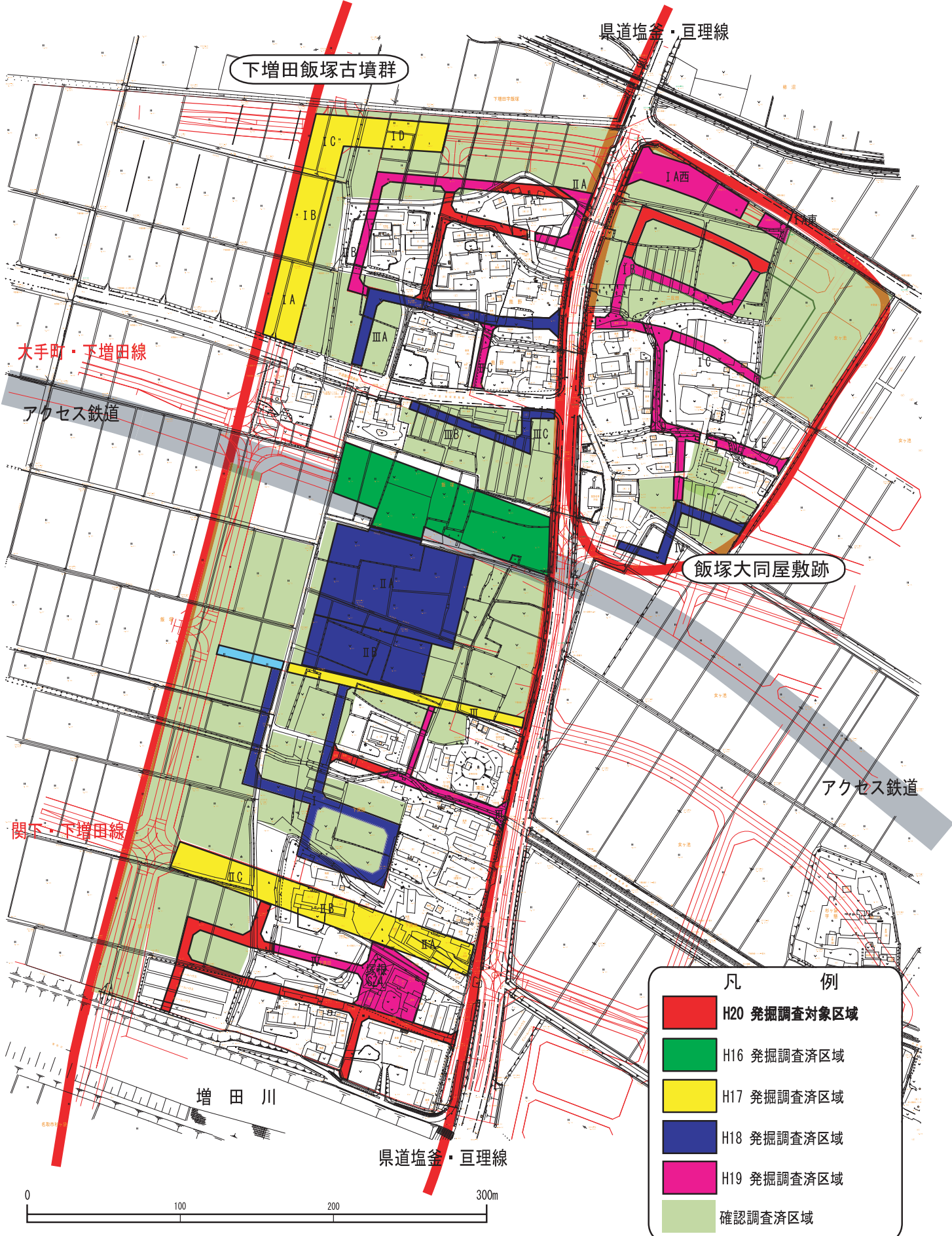
遺跡周辺の微地形分類図

② 【調査した場所】

臨空都市の整備に先立って行なわれた今回の調査は、下増田飯塚古墳群ではその範囲のうち、北側は下増田字熊野から南側は増田川北側の下増田字下庚田まで南北約 1 km、東西約 500m の範囲。飯塚大同屋敷跡ではその全域を対象にして、必要な区域の発掘調査を実施しました。実際に調査を行なった場所は、仙台空港アクセス鉄道の路線部分や、道路になる部分、店舗になる部分などで、全体の面積はおよそ 42,000 m²にもおよぶものとなりました。調査にあたっては、年度毎に調査区を  のように設定して実施しています。

調査の結果、本遺跡からは大きく分けて、古墳時代前期から中期頃（今から約 1,700 年前～1600 年前頃）にかけてのもの、鎌倉・南北朝時代頃（今から約 800 年～600 年前頃）のもの、江戸時代の後半以降のもの（今から約 250 年前以降）が見つかっています。

下増田飯塚古墳群の調査区



凡 例	
■	H20 発掘調査対象区域
■	H16 発掘調査済区域
■	H17 発掘調査済区域
■	H18 発掘調査済区域
■	H19 発掘調査済区域
■	確認調査済区域

③ 【古代の水田跡 下増田飯塚古墳群】

下増田飯塚古墳群・いいつかだいどうやしきあと飯塚大同屋敷跡が所在するひんてい浜堤の東西両側区域には、平安時代頃にも広く低湿地帯が広がっていたと考えられます。近年は、鉄道や宅地が造成されて面影も失われつつありますが、つい最近までこの周辺一帯では水田が広がる景観が見られました。

調査区の北西隅付近では、そうした低湿地部で営まれた水田の跡や、必要な水を供給したり、排水したりするための基幹となる水路などの遺構が見つかっています。また調査区北端では、東西方向に流れる小規模な旧河川の跡が見つかっており、ある時期には基幹となる水路とこれらの河川は接続していたのかもしれませんが。



古代の水路と水田跡

基幹水路と考えられる溝跡は、215～217号溝跡の3条が見つっています。この内、215・216号溝跡は南北方向の水路跡で、水田のすぐ脇で合流して大きく東側へ向きを変えて延びていきます。また、217号溝跡は、水田の南際に沿うように北東方向に延びている水路跡です。これらの水路跡は、幅が2.5m前後、深さ0.6～0.8m前後で、断面形は幅広い半円形状を呈しており、最も長く確認できた215号溝跡は南北約130mにわたるもので、さらに調査区の外側へも続いて延びる規模の大きな水路です。

これらの水路に堆積していた土壌を観察したところ、いずれの水路も同様の土の埋まり方であったことから、ほぼ同じ時期に機能していた水

路であることや、大きく2つの時期の変遷があることが分かりました。

新しい段階の水路に埋まっている土の中ほどの位置には、海のものと考えられる砂層があることが分かりました。この砂層は、水路の中だけでなく周辺一帯の低湿地部などでも確認されていることから、津波によって運ばれてきたものの可能性があります。この砂層より下の方に埋まっている土の中からは、およそ9世紀頃のものと考えられる土師器・須恵器と呼ばれる土器が出土し、上の方に埋まっている土の中には、およそ10世紀初頭頃に降下したと考えられている灰白色火山灰の層が認められることから、この砂層は、貞観^{じょうがん}11年（869年）の地震による津波で堆積した砂層の可能性ががあります。



水路に溜まった土の様子



見つかった水路



水路からの出土品 (土師器)
はじき



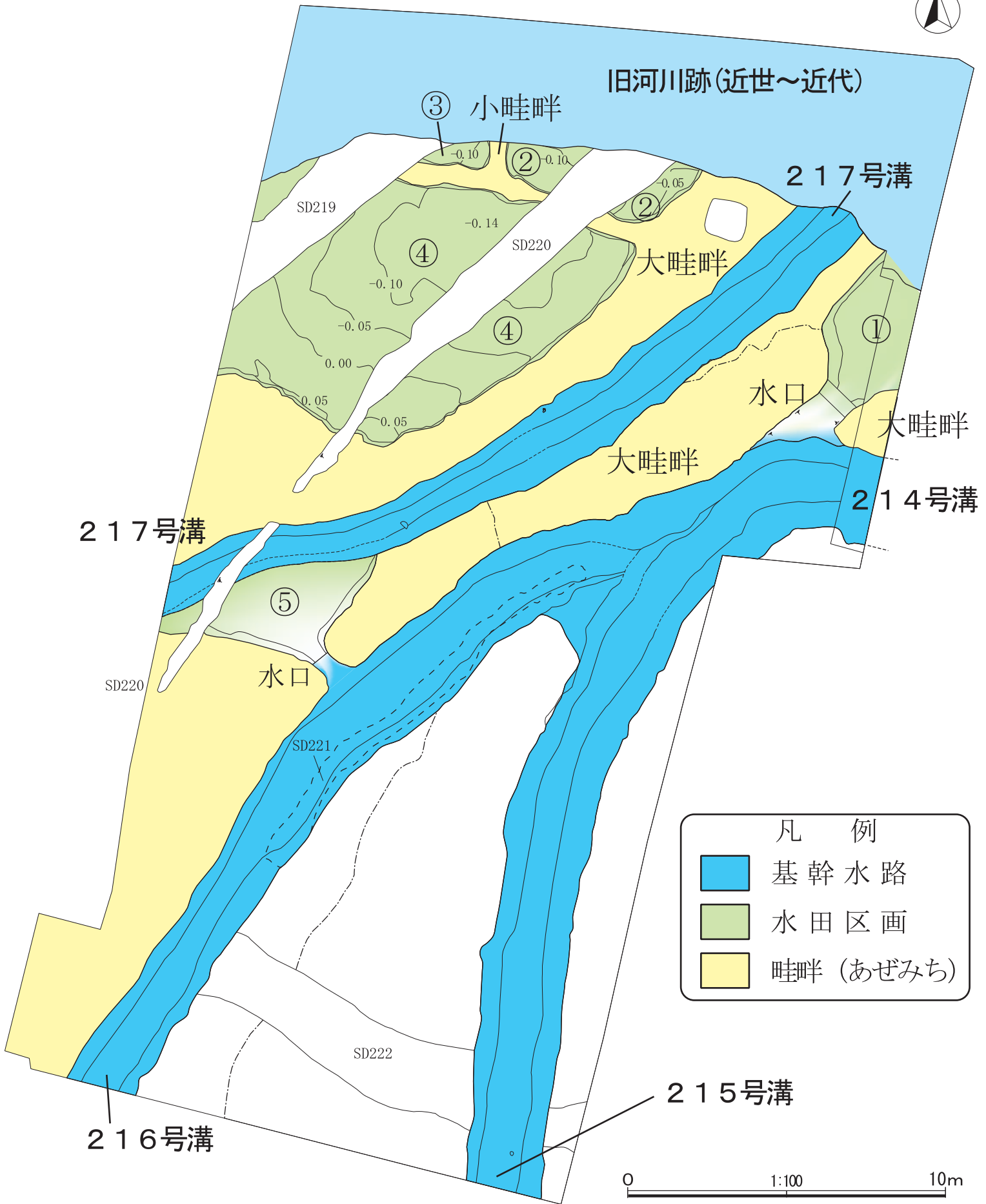
水路からの出土品 (須恵器)
すえき



水路からの出土品 (土師器)
はじき



水路からの出土品 (底板)



旧河川跡(近世~近代)

③ 小畦畔

217号溝

SD219

SD220

大畦畔

水口

大畦畔

214号溝

217号溝

大畦畔

水口

SD220

SD221

SD222

215号溝

216号溝

凡 例

- 基幹水路
- 水田区画
- 畦畔 (あぜみち)

0 1:100 10m

基幹水路と水田跡

《水田区画》

見つかった水田の区画は、①～⑤の5区画あり、あわせてこれらを区画する大・小の畦畔^{けいはん}、水路から取水するための水口なども見つかっています。調査地点が水田区域の端付近に位置していることもあり、全体の大きさを把握出来たものはありませんが、区画の大きさは一辺が3m～10m前後のものだと思われます。見つかった水田の中には、基幹水路内^{きかんすいろ}に埋まっていた土に見られるのと同じ砂層におおわれた状態で見つかっているものがあり、津波により水田が埋没してしまったものと思われます。水田内部に埋まっていた砂層の厚さは概ね^{おおむ}3cm～5cm前後のものであり、その上部には水路内と同様に、灰白色の火山灰も堆積していました。こうした平安時代の地震・津波・火山灰の降下などの、度重なる自然災害の影響などによって、その後の水田耕作は、放棄されてしまったものと思われます。

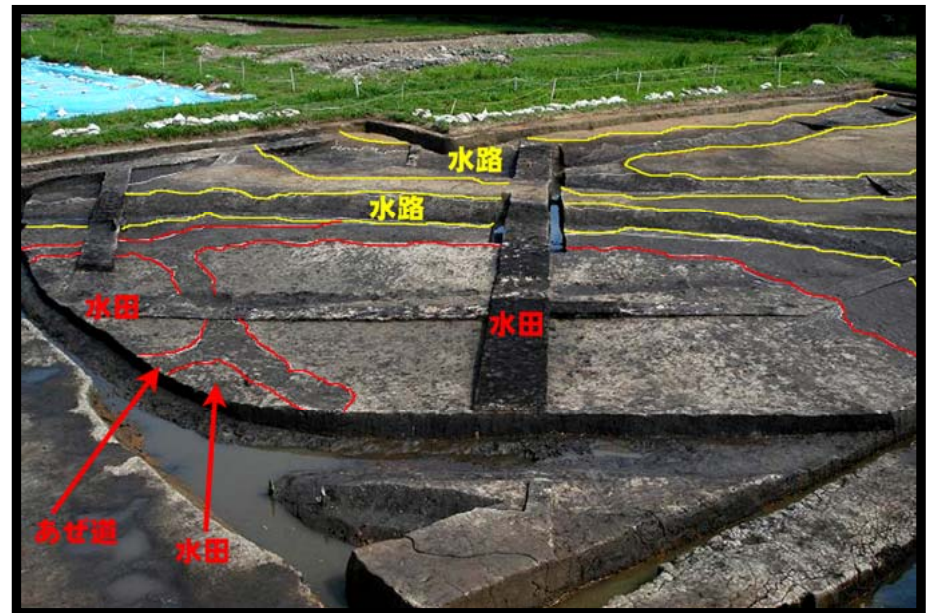
見つかった水田と水路→



砂でおおわれた水田



用水路と水口



砂でおおわれた水田区画

④【下増田の中世】

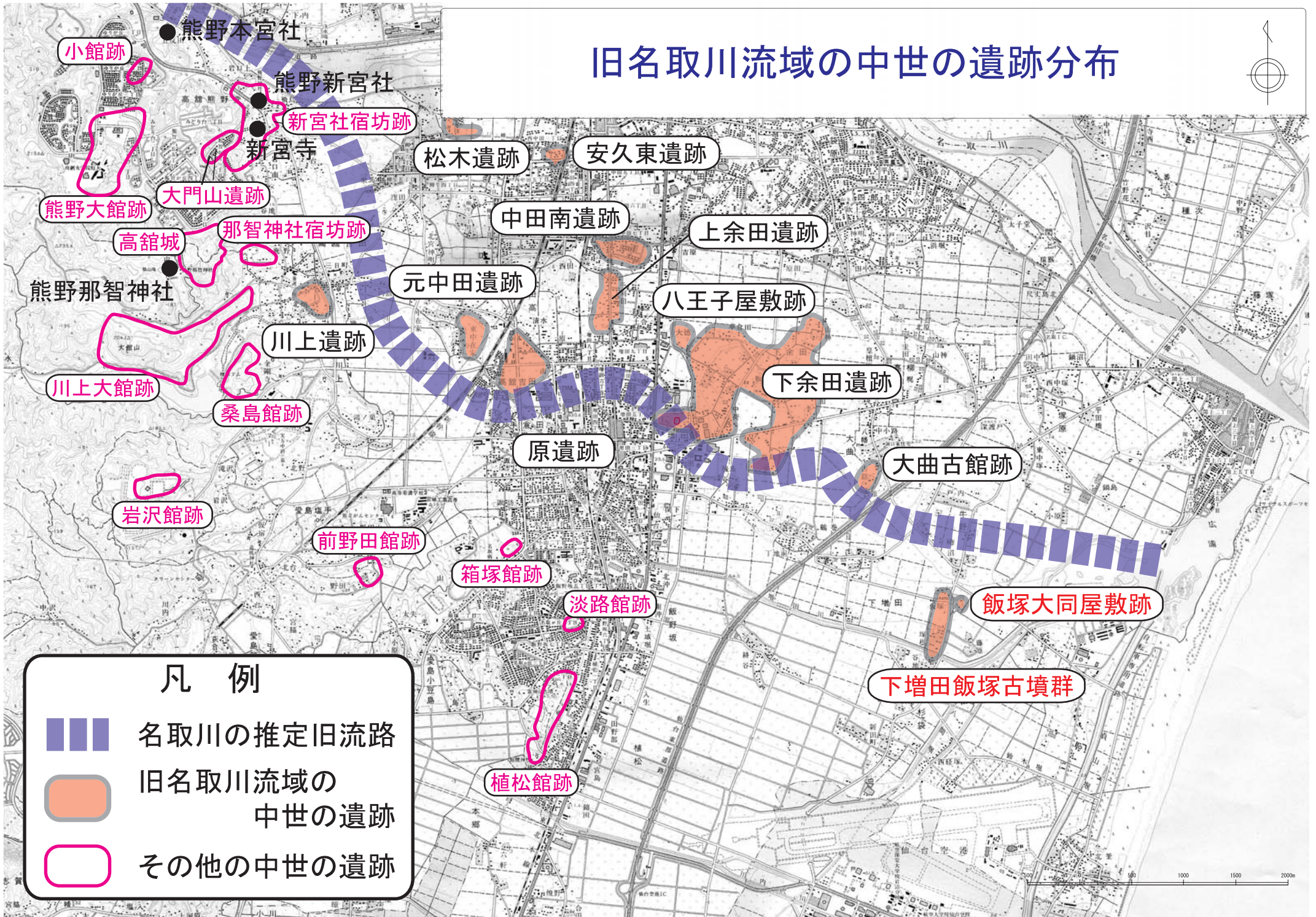
今回の調査により、遺跡が所在する浜堤上から、鎌倉時代や南北朝時代のものを中心とする遺構や遺物が多数見つかりました。見つかったものには、たてあない こう 竪穴遺構・ほったてばしらたてもものあと 掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡などの遺構や、国産の陶器類、輸入された磁器、木製品などの遺物があります。これまで遺跡周辺をはじめとする中世の下増田地区の状況については、手掛かりとなる史料が少なく、詳しいことはあまり知られていませんでした。遺跡の近くでは、びしゃもんどうこふん 毘沙門堂古墳上のせきぞうくようとう 石造供養塔いたび（板碑）3基が知られていた程度であり、今回の調査で見つかった史料は、中世の様子を知る上での貴重な発見となりました。

●鎌倉時代～南北朝期の屋敷跡

下増田飯塚古墳群と飯塚大同屋敷跡いづかだいどうやしきあとのほぼ全域にわたり、鎌倉時代～南北朝時代(13～14世紀頃)にかけての遺構や遺物が数多く見つかっており、遺跡が所在する浜堤上に一定規模の集落が営まれていた事がわかりました。

遺跡が所在する浜堤ひんていの北側付近は、当時の名取川が東西方向に流れてひろうら広浦へと注いでいたものと思われます。現在の名取川の流路は、高館熊野堂付近で丘陵部から平野部へと出て、そのまま東側へ延びて仙台市郡山付近で広瀬川と合流し、南東方向へやや流れを変えてゆりあげ閑上で太平洋へと注いでいますが、中世頃の名取川の旧流路は、現在の流路よりもずっと南側を流れて、広瀬川とも合流しないで現在の広浦へと注いでいたものと考えられています。市内でも中世の遺跡は、この旧名取川の流路沿いに多く分布しており、本遺跡もそのような遺跡の一つであると思われます。

旧名取川流域の中世の遺跡分布

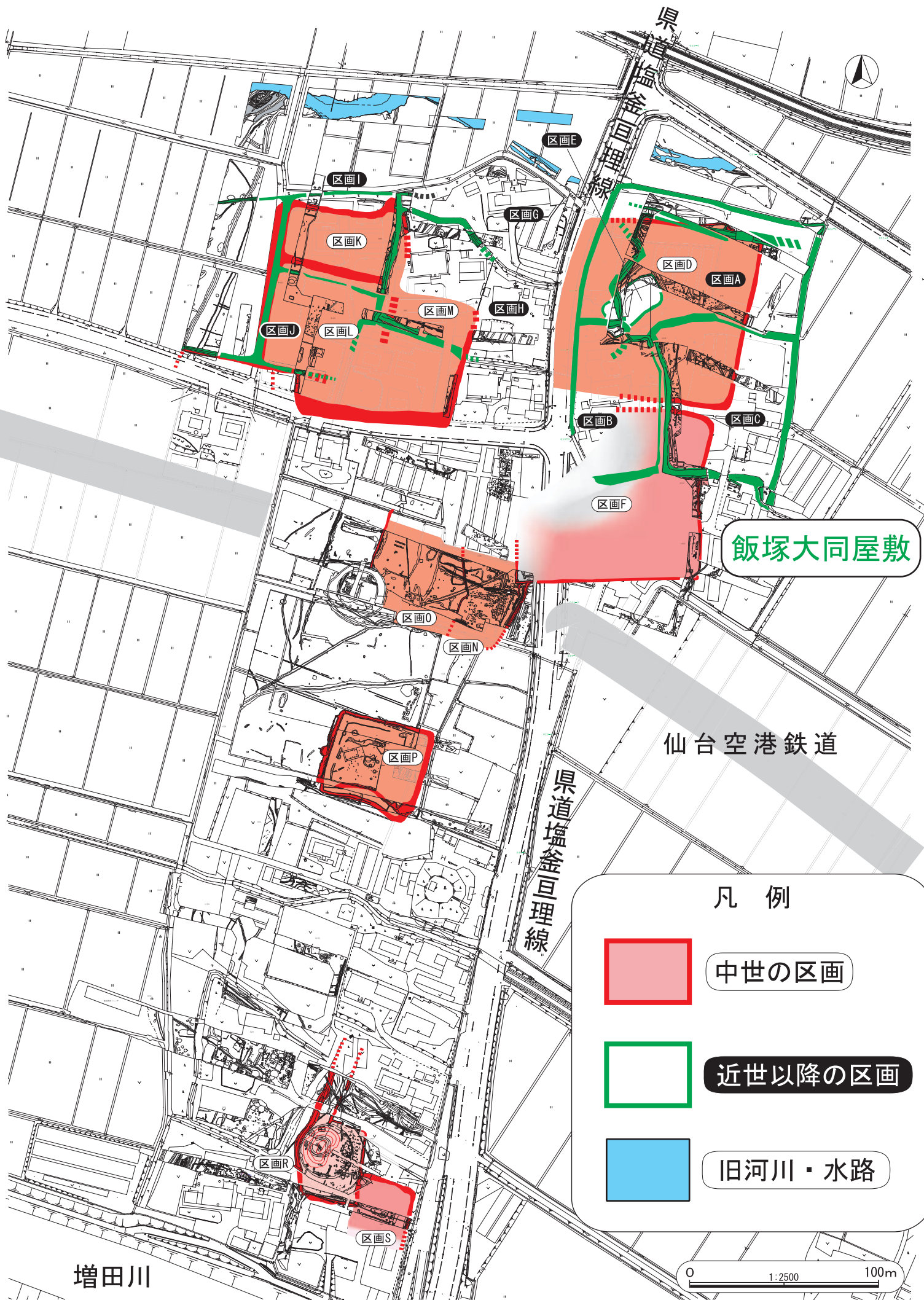


- 凡 例
- 名取川の推定旧流路
 - 旧名取川流域の中世の遺跡
 - その他の中世の遺跡



見つかっている遺構には、竪穴遺構・掘立柱建物跡・井戸跡・土壇・溝跡などがあり、これらの遺構の多くは、周囲を方形や長方形の溝跡（区画溝跡）で囲まれた内側や外側で見つかっています。このような特徴を持つ遺構群は、当時の屋敷跡だと考えられています。区画溝は屋敷の外側全体を囲むものや、一部の範囲だけを区画するもの、部分的に2重の溝に囲まれている区画もあります。また、1つの区画に隣接して別の区画が連続して続くと思われる部分もありますが、調査区の関係もあり集落全体の状況については不明な点も多く残っています。今回の調査では、遺跡全体で中世の屋敷跡と考えられる区画は10カ所ありますが、調査区の関係で区画溝が確認出来ていないだけで、実際には、さらに多くの区画が存在していると考えられます。

個々の屋敷跡の大きさは、一辺が約 50～80m 前後の方形・長方形形状のものが多く、近隣の調査で見つかっている同じ時代の屋敷跡の規模と、概ね同様の傾向が見られます。屋敷内部の様子は、それぞれの区画で構成される建物の形態や配置などに差がありますが、多くは主となる建物跡や付属建物、井戸跡や大型の土壇群から構成されているようです。また、中には大型で他の掘立柱建物跡とは形態も異なる建物が建つ区画も確認されており、単なる生活の場とは異なる区画もあった可能性があります。以下では、屋敷を構成する建物跡の詳細などについてご紹介いたします。



飯塚大同屋敷

仙台空港鉄道

県道塩釜巨理線

増田川

凡例



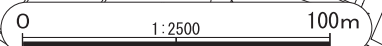
中世の区画



近世以降の区画

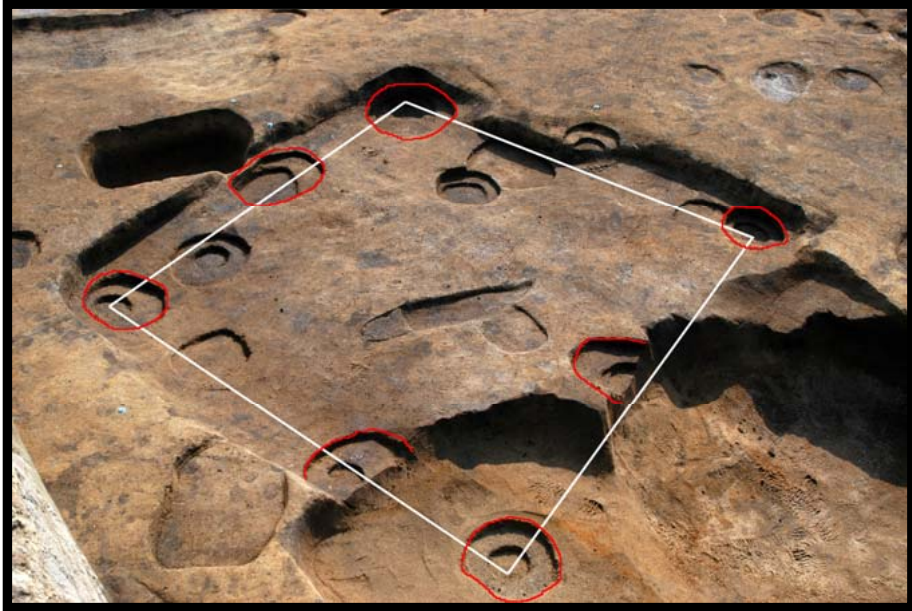


旧河川・水路



たてあないこう
《**豎穴遺構**》

豎穴遺構は、豎穴住居跡のように、地面を掘りくぼめた底の部分が概^{おおむ}ね平坦になっているが、人が居住した様子や痕跡^{こんせき}が見られないため、住居跡とは考えにくく、他の用途のために造られたと思われるものです。見つかった豎穴遺構は長方形状のものや、不整形なものがあり、大きさも長軸 2～7m と一様ではありません。実際にどのような目的のために造られたのか分かったものはありませんが、中には底の部分から柱穴が見つまっているものがあり、屋根がかけられていたものと思われます。何か大事なものなどが収納されていたのかもしれませんが。



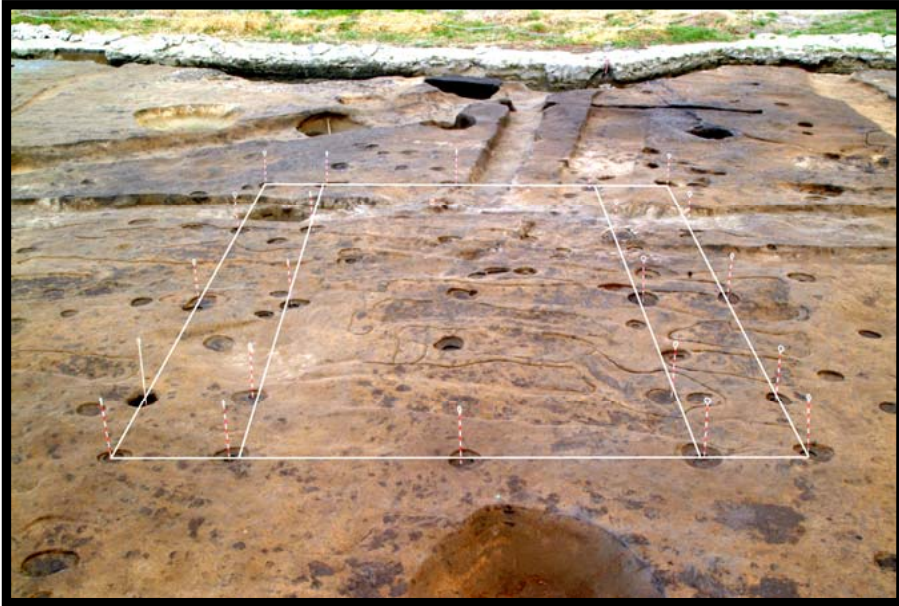
豎穴建物跡



豎穴遺構

ほったてばしらたてもものあと
《掘立柱建物跡》

鎌倉～南北朝時代のものと考えられる掘立柱建物跡は、屋敷の区画の内
外から数多く見つかっています。柱穴の配置や組み合わせを見てみると、
形態・規模なども多少のばらつきはありますが、方形や長方形を基本とし
ており、それに縁えんや庇ひさしなどが付属する簡易なものが中心です。見つかった
柱の穴も直径 30～50 cm前後の小規模なもので、大きな建物や瓦が葺ふかれ
た重量のある屋根などを支えられるような太い柱ではなかったようです。
こうした点からも簡易な構造の建物であったことが伺われます。柱穴の詳
細な状況を確認するため、埋まっている土の半分を慎重に掘って行くと、
柱を据えた位置や、柱の太さ、腐らずにのこった柱材の一部や、柱の沈み
こみを防ぐために入れられた根石ねいしなどが確認される場合があります。



縁・^{ひさし}庇のつく掘立柱建物跡



横長で大型の建物跡



柱穴の様子



腐らずのこっていた柱材



底に埋められた根石

《井戸跡》

屋敷跡の内外では、複数の井戸跡が見つかっています。井戸跡は直径1～3m前後の円形・楕円形だえんけいの範囲を掘り込み、底面の中央付近をさらに1段掘りくぼめた底の部分に、澄んだ水を溜めるための曲物まげものが据えられていました。また、井戸によっては、上段の部分に板材で組んだ井戸枠が見つかったものも少数あります。

また、こうした井戸の周囲では、大型の土壙どこう（性格は明確ではないが、人為的に掘り込まれた穴のこと）が多く見つかる場合があります。土壙の中からは曲物や井戸枠などは見つかりませんが、これらは単に地面を掘りくぼめただけの素掘りの井戸跡や、井戸が壊れたために曲物や枠などが抜き取られた跡などの可能性があります。



井戸の底に埋められた曲物



見つかった井戸枠の残がい



井戸の底に埋められた曲物



素掘りの井戸

どこうあと 《土壙跡》

中世の屋敷跡の周囲では、多くの土壙跡（性格は明確ではないが、人為的に掘り込まれた穴のこと）が見つかっています。見つかった土壙の大きさは長軸が約1～8mまでのものがあり、円形・楕円形・長方形などをはじめとする様々な形態のものがあります。中には屋敷跡を区画する溝跡と連結している土壙もあり、用水などに関わるものの可能性があります。これらの土壙の中からは、陶器や木製品などの当時使用されていた様々なものが出土しています。また、ひとがた人形・ふながたじょう船形状木製品と呼ばれる「まじない」に関係すると言われる木製品その他、多くの木製品がまとまって出土した土壙もありました。こうした土壙は、通常の使用のために掘られたものではなく、何らかのさいし祭祀を行うために造られたものなのかもしれません。



土壙を半分掘った様子



木製品が多く出土した土壙



木製品 (柄杓^{ひしゃく}) が出土した様子



区画溝とつながっている土壙



さいし
祭祀が行なわれた土壙と出土品



ひ もの わん
挽き物のお椀



ふながたじょうもくせいひん
舟形状木製品が出土した様子

《性格不明遺構》

性格不明遺構とは、区別は明確ではありませんが、用途や性格が不明な遺構の中で、これまで紹介しましたたてあないこう 竪穴遺構やほったてばしらたてもものあと 掘立柱建物跡などをはじめとする定形的な遺構ではないものの呼称です。大きさ・形態・掘り込まれた深さなども様々で、遺構の中に溜まった土を取り除いて確認してみると、不思議な形に掘り込まれたものや、溜まった土の状況や出土品の種類・出土状況などに、通常とは異なる特殊な状況が見られる場合もあります。このような点やこれまでの調査事例などを手掛かりに、どのような性格や目的で造られた遺構なのかを検討しますが、最終的にどのような遺構であるかを明確に出来ない場合も多くあります。



見つかった様子



赤丸部分の様子



水色部分を払って調査し、全体を確認した様子

●さまざまな生活の道具

下増田飯塚古墳群・飯塚大同屋敷跡付近には、鎌倉時代～南北朝時代に集落が形成されており、集落を拠点とする様々な活動が営まれていたことでしょう。このように生活の舞台となっていた場所からは、陶磁器類や木製品・金属製品・石製品など、その当時に実際に使用されていた様々な物が出土します。そうした出土品を詳しく観察したり、他の出土例などと比べてみたりすると、使用されていた時代や生活の様子などの様々な情報を得る事ができます。

出土した陶磁器類には、お碗や皿などの食膳具、壺や甕などの貯蔵具、すり鉢などの調理具が出土しています。これらの陶磁器には、

あつみやき とこなめやき こせと 渥美焼・常滑焼・古瀬戸などの国内の有名な商品や、わずかですが青磁と
呼ばれる中国から日本へ輸入されてきた高級品も含まれています。また、
こうした有名な商品を製作する技術を導入・模倣して、地元の窯跡で生
産された陶器も多く出土しています。地元の製品の中では、現在の白石
市にある窯跡群付近で生産されたものの量が多かったようです。



とうき
土壙から出土した陶器



とうき
溝の中から出土した陶器の壺

現在の私たちの生活でも木の製品を多く利用していますが、当時の人々の生活において木の製品が占める重要度は、現在よりもずっと高かったものと思われます。調査を行った地点の^{どじょう}土壌は多くの水分が含まれており、通常の土壌であれば腐って失われてしまう木製品も、比較的良
好な状態で見つかっています。見つかった木製品は、^{しっき}漆器のお椀や、
^{ひきもの}挽き物の皿、^{おけ}桶・^{まげもの}曲物の底板の部分、^{おしき}折敷と呼ばれる食器などをのせる
ためのお盆の底板、竹製の籠など、多様なものが見つかっています。出
土品を観察してみると、現在のもの比べても見劣りしない仕上がりや
加工技術が見られるものも多くあります。



出土した生活の道具 (漆器のお椀)



出土した生活の道具 (木製のお椀)



出土した生活の道具 (曲物の底板)



出土した生活の道具 (竹製のかご?)

珍しい出土品の1つに烏帽子えぼしがあります。烏帽子は主に平安時代から江戸時代頃かぶに被られた成人男性の被りものです。平安時代以降には広く一般庶民も被っていたといわれており、南北朝期頃までは、被りものを被っていない事は恥ずかしいことであったと言われてしています。烏帽子の材質は、絹や紙などの表面に漆うるしを塗り固めたもので、「立烏帽子たてえぼし」や「折烏帽子おりえぼし」などのいくつかの形態のものがあります。出土したものはこうした烏帽子の一部のため、大きさや形態など全体の状況は分かりませんでした。表面を顕微鏡で良く観察してみると、規則的に並ぶ凹凸が多数認められるため、下地に固定した織物の表面に漆が塗布されたものと考えられます。烏帽子が発掘調査で出土した事例は多くはありませんが、近い所では、仙台市富沢遺跡や岩手県平泉町の柳ノ御所跡やなぎのごしょあとなどでも出土しています。

出土した石製品には、砥石^{といし}や石臼^{いしうす}などがあります。砥石は使用する石材により粗砥ぎ用のものや、目の細かい仕上げ用と思われるものなどがあり、砥石に適した石材をある程度選択して使用していたものと思われます。石臼は、主に粉を挽くための「粉挽臼^{こびきうす}」や、茶臼^{ちやうす}などの破片が見つかっており、表面に触れてみると使用によって滑らかな手触りになっているものもあります。

金属製品では、古銭が見つかっています。中世の遺構から見つかっている古銭は、北宋銭^{ほくそうせん}などの渡来銭^{とらいせん}です。中には、お墓^{どこう}と考えられる土壙から6枚まとまって出土したものがあり、「六道銭^{ろくどうせん}」としてお墓と一緒に埋められたものだと思われます。「六道銭」は、死者が三途^{さんず}の川を渡る際の渡し賃や、死後の世界を旅するための路銀^{ろぎん}にするために、死者と一緒にお墓に入れられたものと言われています。



えぼし
烏帽子が出土した様子



けんびきょう
表面の部分を顕微鏡で見た様子



出土した石臼の破片



ろくどうせん
六道銭が出土した様子

いづかだいどうやしきあと

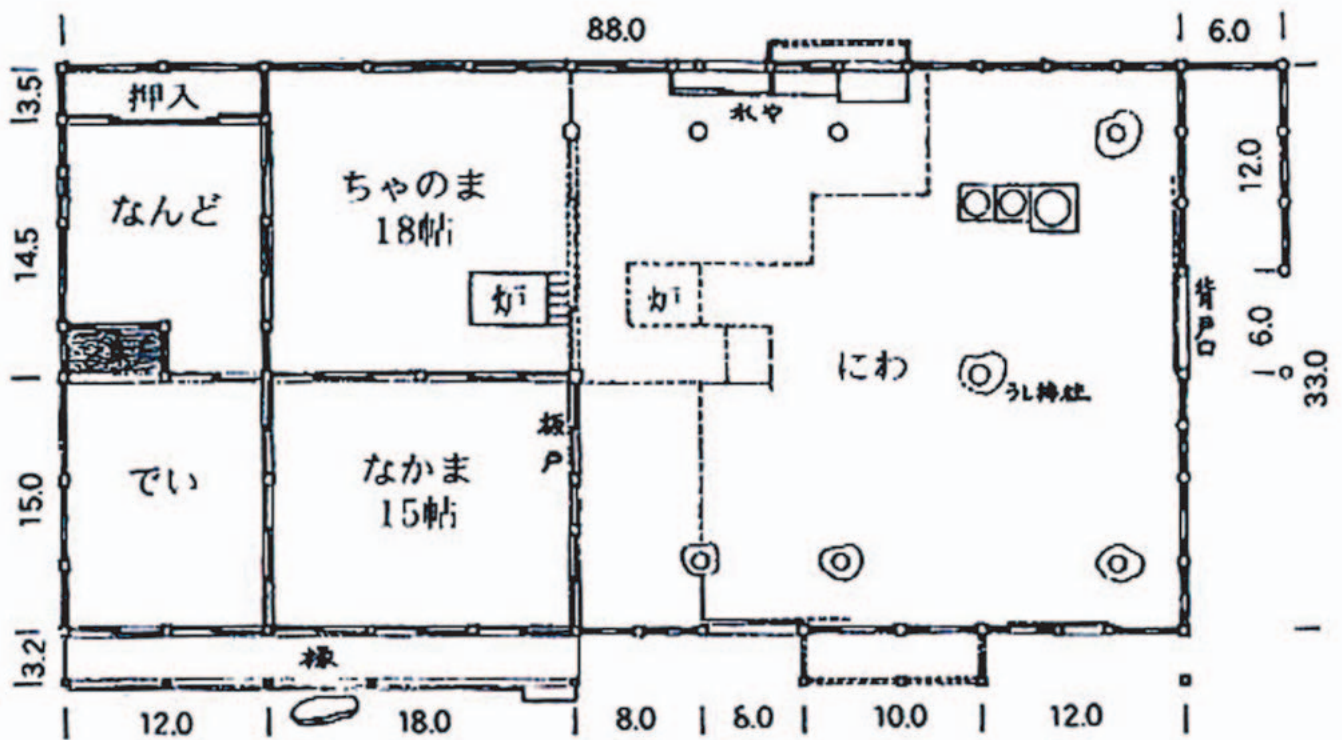
⑤ 【飯塚大同屋敷跡】

●大同屋敷の概要

下増田字二反田にたんだに所在した飯塚大同屋敷跡は、市内で最も古い屋敷跡の1つとして知られた近世の古民家です。屋敷全体の規模は約5反歩（約5,000 m²）以上と広大で、屋敷の外側や内部は幅5m程の堀で区画されて大きく3区画に区割りされていました。かつて南側正面入口の堀にかか
る橋の屋敷側の両脇には、一対のひのき 桧の古木がありました。その桧の木が強風により倒木した際に年輪を数えたところ、少なくとも200年以上は経っているものであったと言われており、屋敷自体は、それ以前に建てられたものと思われます。

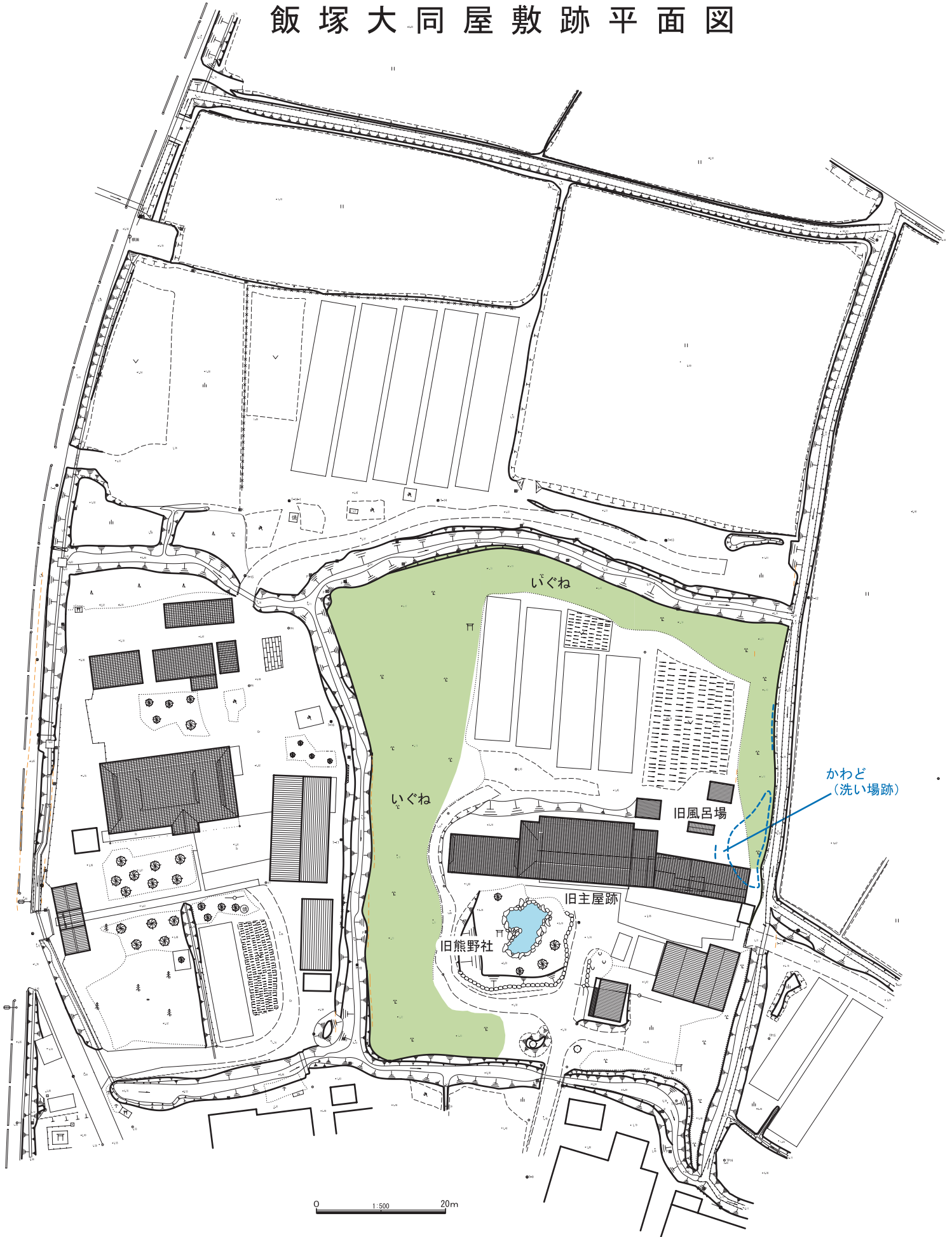


在りし日の大同屋敷



「名取型間取り」大同屋敷間取り図

飯塚大同屋敷跡平面図



●屋敷周辺の発掘調査

今回の発掘調査では、この飯塚大同屋敷の敷地内や、その周囲についても調査を行いました。調査した結果、最近まで地表面でも確認できた3区画の区割りの内側にも、区画溝と思われる規模の大きな溝跡がいくつか見つかっています。しかしこれらの溝跡が旧段階の区画溝なのか、どの範囲を区割りしていたかなどの詳細を把握することは出来ませんでした。また、大同屋敷の西側区域でも区画溝が多く見つかっており、区画が連続的に続いていた可能性が考えられます。

屋敷の内部では、掘立柱建物跡、井戸跡、用水施設などが、屋敷地の北側では、旧河川跡なども見つかっています。



見つかった掘立柱建物跡



井戸跡の様子↑



げた
下駄が出土した様子↑



ます
用水を引き込むための柵→

●さまざまな生活の道具

発見された建物跡や屋敷を囲む堀跡の中からは、多くの遺物が出土しました。出土品は当時使用されていた陶磁器類が中心で、最も多く出土したのはおよそ18世紀後半～19世紀頃のものと考えられる陶磁器類です。これらの陶磁器の生産地を見てみると、九州の肥前産のもの、東海地方の瀬戸・美濃産のもの、福島県の大堀・小野相馬焼を中心に、堤焼などの仙台近郊で焼かれたもの、福島市の岸窯跡や加美町の切込焼、もともと瓦を焼いていた人達などによって生産された瓦質土器などが少量見られます。このような陶磁器の構成は、その当時の仙台周辺に流通していた陶磁器類の状況をよく表わしています。

出土した陶磁器類の種類を見てみると、お碗・鉢・すり鉢・皿・灯明皿・猪口・そば猪口・紅猪口・爛徳利・油徳利・土瓶・急須・香炉・焙烙・壺・甕・火鉢など、様々なものが出土しており、この他、陶磁器以外にも、古銭・柄鏡・刀の鏢・釘・煙管などの金属製品や、下駄・曲物・箸・漆器などの木製品、硯・砥石などの石製品、土人形などの土製品などが出土しています。これらの出土品からは、江戸時代の後半頃になり、徐々に人々の生活スタイルが、多様化していた様子などが伺われます。